

仕上げに恋をひとつまみ 1

Y u i e s T a t s u y a

広瀬もりの

Morino Hirose

ternity



エタニティ文庫

目次

仕上げに恋をひとつまみ 1

5

ドリームランドに行こう！

213

真夏のホットチョコレート

265

仕上げに恋をひとつまみ 1

1

ランチタイムが終了したばかりの店内は閑散としていた。

私の座るテーブル以外はすべて空席。車道に面した大きな窓にはレースのカーテンがゆったりと掛かり、高級店にふさわしいシックな色合いの内装がさらに期待を膨らませてくれる。

前菜は盛りつけもお味も及第点。色とりどりの野菜を練り込んだパテが多少大味な気もしたけど、添えられていたハーブ風味のソースは美味しかった。ポタージュも素材の味をとてよく引き出していたと思う。

さて、いよいよ次は肉料理。脂の焦げる香ばしい匂いと共に運ばれてきたのは、鉄板の上でジュウジュウと音を立てる俵型のハンバーグ・ステーキだった。

「お待ちせいたしました。当店一番人気のメニユー、厳選した国産和牛の赤身肉のみを使用した特製ハンバーグです。肉はミンチ・マシーンは一切使わず、包丁のみで叩いておりますので、独特の歯ごたえも存分にご堪能いただけます」

へええ、これがリピート率ほぼ百パーセントという噂の逸品か。高級フランス料理店イチ押しハンバーグ・ステーキって言うだけあって、なかなか美味しそうじゃない。

「鉄板が大変熱くなっておりますので、お気をつけください」
「ありがとうございます。それではいただきます」

上に飾られたクレソンを脇にどけて、まずは豪快にナイフを入れる。おお、中はピンク色。デミグラスソースもたっぷり掛かっていて、食欲をそそる。

そして、大きめに切り分けた一片をゆっくりと口に運ぶ。しかし次の瞬間、夢の時間は儚くも終わった。

——まっ、まっ………！

嘘でしょう、なんなのコレ。ちょっと待って、あり得ないから。

どうしてこんなに脂がしつこいの？ どうしたらここまで素材の良さを破壊できるのかわからないほど、お粗末な仕上がりがりだ。

こんなものを食べさせられて次も注文しようと思うなんて、どんなチャレンジジャーたちなの。嘘お、マジで？

「どうですか、お味は。ご満足いただけましたでしょうか？」

このテーブルにびったりと張り付いている店のオーナーが、自信満々に声を掛けてくる。口の中で嫌な感じに広がる脂臭さを取り除こうとミネラルウォーターを一気飲みし

ていた私は、もう少しでむせてしまうところだった。

「え、ええ……と、とても美味いのです！」

うん、とりあえず、このお水がね。テールルの端に置かれたミネラルウォーターの瓶を眺める。フランス産の硬水かー、とても綺麗なパッケージデザインだわ。

「それは光栄です！ 如月社長より、田村様は見かけによらずたくさんお召し上がりになる方だと伺っております。特別にもうひと皿、同じものをお持ちしましょうか。その代わり、コラムの方も特別な味付けをお願いしますよ」

「えっ、えーっと……それは、結構です。本日は料理を一品ずつじっくり味わうことが大切ですから、他のメニューも一通り食べてみないと……」

冗談じゃない、こんなの食べ続けたら、本当におなかを壊しちゃうわ。まったく、社長も余計なことを言ってくれるんだから……！

「そうですか。では、次は魚料理のメイン、舌平目のムニエルをご賞味くださいませ」
う、うわあ、まだ続くのっ!? しかも、今度のも脂がノリノリになってますけど。

「す、すみません」
「なんででしょうか？」

善良そうなオーナーは、眩しいほどの微笑みで私を見つめてくる。

「……お水のお代わり、いただいてもよろしいですか？」

まさか、魚料理をキャンセルさせていただきと言えはるはずもないしね。これが最大の譲歩だったんだから。

私、田村結衣の勤める「如月企画」は雑居ビルの一角にある。地元の商工会議所に勤めていた社長が興じた会社で、目指すは地域のさらなる活性化。現在は地元タウン誌やパンフレットの制作、ショップのホームページ作成と運営などを幅広く請け負っている。昨年春、美大を無事に卒業したものの就職先が決まらなかった私は、ウェブデザイナーとしてここに拾ってもらったわけ。でも、ホームページ作成なんてそうそう注文が入る訳じゃないし、一度テンプレートを作ってしまえば、その後の更新や管理はそれほど大変じゃない。

だから、普段の主な仕事はお茶くみやコピー、お使いだったりする。ようするに雑用係ってところかな。

そんな感じで働いているうちに、気がついたら新年を迎えていた。そろそろ入社から十ヶ月になるんだね。

社長以下常勤社員六名の小さな会社だし、これでもなかなか役に立っていると思うんだ。ただ、最近困った仕事を押しつけられちゃって、それが悩みの種なんだよな……

「なんだよーっ、田村ちゃん！ 駄目じゃないか、こんなやる気のない文章じゃ」

提出してから五分も経たないうちに、社長兼タウン誌編集長が大声を上げた。彼が手にしているのは、先ほどの高級フランス料理店を紹介した私の原稿。

「これじゃあ、食べたメニューをただ羅列しただけじゃないか。もつと……なんていうかなあ、実際に口にした率直な感想とか、そういうのをふんだんに盛り込んでくれなくちゃ。前回の田村ちゃんのコラムを見たオーナー直々のご指名だったんだから、頑張ってもらわないと困るよ」

「えーっ、……でも、先ほどもご報告しましたとおり、あそこの料理はなんといいいますか……」

とにかく、駄目駄目なハンバーグ・ステーキだったんだもん。肉料理に続いて魚料理も完全に味が破壊されていた。あれだけ素材の良さを打ち消してしまえるって、ある意味すごい技術だと思う。せめてデザートはと期待したのに、こっちもばっさばさのガトーシヨコラで玉砕よ。

「そこをなんとかしなくちゃ。本当に旨いものの味を知っている田村ちゃんだから、なんとかいいところを見つけ出して、ほら……」

「で、でも……」

「実際、前回の原稿はお世辞抜きで素晴らしかったよ！ 田村ちゃんのコラムを読んだ人たちが紹介した店に詰めかけて、一ヶ月の売り上げが一気に倍になったって話だから

ね。他にもこのコーナーで紹介してほしいという依頼がいくつも来てるし、とくに今回の店は毎回大きく広告を入れてくれるとだから、丁寧に扱わないとやばいんだよ」

……と言われてもなあ。

「『美食☆コラム』は大食らいの田村ちゃんにはもってこいの仕事だと思うよー。その店自慢の料理やデリを毎回腹いっぱい食べることができると、しかもタダで！」

言いたい放題の社長の言葉に、他の社員さんたちも笑いを噛み殺している。ひどいよ、みんなして。こっちは命に係わる大変な問題なのに。

「あ、あのですね、社長！」

新入りの下っ端が口答えなんておこがましいけど、そろそろ限界だった。

「そりゃあ私は、普段から人の何倍も食べますよ？ でも、ただの大食らいとは違うんです。自分の舌が認めた美味しいものじゃないと、おながが膨れるどころか、かえって身体を壊してしまう特異体質なんです！」

これはなかなか説明しにくいことなんだけど、誤解されたままだと私自身のみとこに留まらず、周囲の人たちにまで迷惑をかける可能性があるため、あえて公言させてもらっている。

毎日のお弁当がうら若き乙女にふさわしくない重箱三段重ねなもの、そんじょそらのランチメニューじゃ三人前食べても満腹にならないからだ。仕事の途中に空腹で倒れ

るわけにもいかないし、ここはもう格好なんてつけていられない。

「それに、前回取材した焼き菓子店は、子どもの頃から通い詰めているお気に入りです。から。なんだって、思い入れが半端じゃなかったんです！」

タウン誌の新企画として、おすすめレストランやショップのコラムを連載することに。なったのはつい最近のこと。その第一弾の取材先が知らされたとき、私の胸は高鳴った。本当はすでに別の社員さんが担当になることが決まっていたのに、押しの手で譲ってもらったんだ。

「そりゃ、田村ちゃんの言いたいことはよくわかるよ。でもこれは仕事なんだからねー。まあ、今回は俺が上手いこと直しておくから」

「あ、ありがとうございます！」

良かったー、自力で修正はできそうにないって怖気づいていたから。社長に任せれば、ひと安心だ。

しかし、ホッとしたのもつかの間。

「じゃあ、田村ちゃんに次の仕事ねー」

社長は、机の引き出しを開けると緑色のファイルを取り出し、私の方へ投げしてきた。こんなことが簡単にできちゃうのは、単にこの部屋がとても狭いからだ。

もっとも社長は、高校時代に野球で県大会決勝まで勝ち進んだことをいつも自慢して

るから、その腕前を披露したいだけかもしれないけど。

「今度、そこにある店の特集記事を組ませてもらうことになったんだ。『美食☆コラム』とは別枠だね。田村ちゃん、ケーキ大好きだって言ってたでしょう。だから、それ、担当してくれるかい？」

「えっ、えええ……!?!」

ちよつと待って。今、ケーキって聞くと、さっきの激マズのガトーショコラの味が舌先に蘇よみがえってくるんですけど。

「あーっ、ここのお店、知ってますよ。地元じゃ、すごい有名なんです」
そう言って身を乗り出してきたのは、隣の席の真由まゆちゃん。私よりもひとつ年下だけど、この会社でも何年も働いているので職場では先輩になる。彼女はプログラマーの仕事がメインで、かなりの腕前を持っている。ショップの買い物かごのシステムなんかもあったという間に作っちゃうし。

真由ちゃんは、黒縁眼鏡に囲まれた目をくりくり動かしながら言った。

「なんでも、超イケメンのパティシエがほとんどひとりで切り盛りしているって話です。彼を目当てに通うマダムもたくさんいるとか……」

「イケメン？　なんか、胡散臭いなあ」

とにかく気乗りしないことこの上ない私は、話半分に聞きながらファイルをめくって

いた。

「別に顔でケーキを焼くわけじゃないし、そういう評判があるとあまり信用できないな」
口コミとかりピート率とか、ネットをはじめ各メディアが発信する情報はアテにならないものが多い。数字上のデータなんていくらでも操作できちゃうんだから。ま、似たような仕事に携わっている私が偉そうに言う台詞じゃないけどね。

「そう言うと思ったよ。だから、依頼人から、これを預かってある」

社長は、今までどこに隠し持っていたのか、魔法のように大きめの白い箱を取り出した。

「きゃーっ、結衣さん！ 見てくださいっ、どれもすぐく美味しそう……！」

とにかくフットワークの軽い真由ちゃん。ささっと立ち上がって、素早く箱を開ける。「そう？ でも、ケーキは見た目だけじゃ判断できないんだよねー」

そう返事をしつつも、つられて箱の中を覗く私。

ふうん、思ったより普通だな。奇をてらったデコとかもないし、どこにでもあるなんの変哲もないケーキだ。でもかなりミニサイズで、どれも普通のケーキの半分くらいの大きさしかない。

「ねっ、ねっ、結衣さん。どれを食べます？ ひーふーみー……うわっ、二十個近くありますよ！ これならひとり三個、いえ四個は食べられますね。今日は営業の富田さん、直帰だって言ってたから……」

真由ちゃんは、早くも人数分のお皿とフォークをスタンバイしていて、そのひと組を私に手渡ししてくれる。

「えーっ、でも私が先に選んじやっつていいのかな？」

とか言いつつ、無意識のうちにお目当てのケーキに腕が伸びちゃう。

「あれっ、イチゴショートでいいんですか？」

意外そうな真由ちゃんの声に、私はきっぱり言い切った。

「うん、初めてのお店で最初にチェックするのは絶対にコレって決めてるの。スポンジとクリーム、素材がシンプルなぶん、作り手の技量のはつきり表れるんだよねー」

とかなんとか、いっぱしにグルメぶったりして。

でもマジで、新規開拓するときには「必ずコレ」という一品を決めておくと楽だよ。

自分の口に合う店なのか否かを、ほとんどブレがなく見極められる。これは洋菓子に限らず、和菓子屋でもパン屋でも、どんな食べ物屋さんでも応用できるんだ。

「横から見た断面も綺麗だし、外見は合格かな」

一切れが小さいぶん、上に載ったイチゴがすごく大きく立派に思える。見た目はどこまでもシンプルで、絞り出しのクリームも控えめにしている。

まあいいや、じゃあ一口――

「………どうですか、結衣さん？」

真由ちゃんが心配して声を掛けてきたのも当然。だって、私、ぱくっと一口頬張ったところで固まってしまったから。どうしよう、早くなにか言わなくちゃ。でも、すぐに言葉が出てこない。

とにかく一度大きく深呼吸して……私は感情のうねりの中から必死に這い上がった。

「お、……美味しいっ……！」

なに、この感動！ 久しく味わったことのなかったとんでもない衝撃だ。

「う、うわー！ すごいっ、すごいよコレ！ なんなのっ、このクリーム。……超絶品!？」

結局ね、ケーキって用いられる材料の選別が何より大切だと思うんだ。適当なところで妥協したら、絶対にいいものにならない。

でも、ここまでの嬉しい誤算ってアリ？ こんな感激は生まれて初めて、まるで夢を見てるみたい。

「えっ、えええ……そんなにすごいんですか？」

驚く真由ちゃんを押しつけ、ケーキの箱を覗き込む。

「私っ、二個目はチョコレート系がいいです！ あ、でもこっちのフルーツタルトも捨てがたいなあ……どうしよう、全然決められないっ！」

すっかりパニックになってしまった私に対し、社長は満足げな笑みを浮かべた。

「いいよ、いいよ。それは田村ちゃんのためにもらってきたものだから、いくらでも食べなさい。その代わり、仕事はきっちりやつてもらうけどね」

「ええ、ええっ！ それは、もちろんです！」

良かったーっ、こんな美味しいケーキならいくらでも褒め称えることができる。とうか、二十三年の人生で一度も出会ったことがないほどの超一級品だよ！

どうしてどうして、今の今まで私の味覚アンテナにこのケーキが引っかかってこなかったの？ それが信じられない……！

新たな獲物をゲットすべく目をランランと輝かせている私を見て、真由ちゃんは大袈裟に溜息をついた。

「いいなー、結衣さんはどんなに食べても太らない体質なんだから。私、こんなに食べたら明日からダイエットしなくちゃですよ。ほんと、羨ましい！」

「えへへ、なんとでも言っつて。中でもケーキは私の大好物、できることなら主食にしちゃいたいくらいなもの。そうするにはお値段が張りすぎるからちよっと無理だけど……」

まあ、太らないけど食べた分だけ食費が掛かるから、いいことばかりじゃないんだけどね。

それにしても、こんなに美味しいケーキショップの特集記事を私が担当？ ……っつてことは、全種類が食べ放題？ うわーっ、それっつてすごすぎ！ 良かった、この会社を

選んで！

「ただねー、今回の話にはちよつと問題があつたりするんだ」

みんなですべてのケーキを平らげたあと、社長が急に真顔になつて言う。

「この店長——ああ、パティシエのことね、とにかく気むずかしくて今回の企画にもまったく乗り気じゃないらしい。だが、依頼人はこのケーキをもっと広く世に知らしめたいという希望を強くお持ちだ。どうだい、田村ちゃん。君にやりこなせるかな？」

「ええ、もちろん！」

たつぷりエネルギー補給をしたあとだったしね、そのときの私はもちろん、やる気満々の返事をした。

2

社長から新たな仕事を受けた日から二日後の朝十時。

私は、問題の店——『Petits Fours』へと足を運んでいた。

天気はいいけど、とにかく風が冷たい。今は一月下旬。この冬は年が明けてから、一段と冷え込む日が多くなった。

最寄りの駅から続く、長い長い坂道。その途中で何度も足がもつれて転びそうになつたには理由がある。一昨日、会社であるのケーキを口にしてからというもの、私はまるで恋する乙女状態になつてしまつたのだ。

どういうことかという、いつもだったら美味しく感じるはずの食べ物、すべてを噛んでいるみたいに味気なく感じて食が進まない。目眩を起すほどふらふらになりながら体重計に乗ると、あつという間に二キロも減つてた。

コレはやバイ！ って、慌てて超有名ブランドの新潟某所のコシヒカリを、どんぶり二杯食べて切り抜けたつてわけ。だけど、あんなにおいしい特級品のお米でも、あのケーキほどの満足感は得られなかつた。

大食いな上に美食家という困つた体質を抱えた私は、我が家のエンゲル係数をひとりで上げまくっている。安月給から工面して毎月五万の食費を家に入れてるけど、それだけじゃ全然足りないみたい。だけどな、これ以上額を上げると、日々のおやつ代が捻出できなくなるし。

そんなわけで、まずはなんとしても取材の許可をもらわなくちゃ。それで無事この仕事をやり終えて「特別手当」とかもらえちゃったら、万々歳だ。それが現物支給だったりしたら、嬉しいことこの上ない。

社長の話だと、アポを取ろうと電話をしたらとりつく島もなく切られたつてことだけ

ど、直接足を運んで誠意を見せれば突破口とつぱくが開けるかもしれないしね。

本当は早速昨日、訪問したいところだった。でも臨時休業と言われて泣く泣くもう一日待つことに。

「さあ、あとちょっとだ！」

私は自分に気合いを入れた。

坂を上りきったその先、山を切り開いて造られた新興住宅地の一角にそのケーキショップはある。……って、そう聞いていたんだけど。あれれ？

私は目的地とおぼしき店舗の前で、思わず立ちすくんでしまった。

「ええと……」

ここのって、本当にケーキを売ってるお店？ 言っちゃ悪いんだけど、なんだかすつく地味な雰囲気なんですけど。でも、他にそれっぽい建物も見あたらないし……

「たぶん、ここでいいんだよね？」

日よけのために取り付けられた布製の屋根は濃紺で、壁の下半分が板張りになっていることも相まって、どこまでも和風なイメージ。

この外観では、ケーキを売っていることにまったく気づかず素通りしてしまうだろう。仮にもケーキショップなわけでしょ？ だったら、もうちょっと華やかな雰囲気にした方がいいと思うけどなあ。

下半分が磨りガラスになっている入口から中を覗くと、ようやくショーケースらしきものを確認することができた。

「まあ、いいや。とにかく中に入ってみるか」

こんなところで立ち往生ちうじやうしているわけにもいかなないと自動ドアの前に立ったとき、ちょうど中からひとりの女性が出てきた。手には大きな白い箱を持っている。側面にぐると印刷された銀の縁取りが、一昨日社長が持っていたケーキの箱と同じだった。

「あらあら、ごめんなさいね。道を塞いでしまって」

自分の母親よりも少し年上に見えるその人は、はにかみながら急ぎ足で私の脇をすり抜けた。店の前に立つ私をお客だと思ったのだろう、彼女は振り向くと親しげに声を掛けてくる。

「このケーキ、本当に美味しいわよね。私、大ファンなのよ。三日と空けずに買いに来てるの。昨日は急なお休みで残念だったわ」

へえ、そうなんだ。ご近所の方なのかな。あのケーキをいつでも気軽に買いに来られるなんて、すごく羨ましい。

いかにもお金持ちなマダムという装いの背中を見送って、私は再び自動ドアに向き直る。

「あれ？」

店内に入ると、そこはもぬけの殻^{から}だった。レジにいるはずの店員さんの姿が見当たらない。

えええっ、どうして誰もいないの？ もしかして、セルフレジとかそんなオチはないよね。

ケーキはとでもデリケートな食べ物だもん。ペーカリーのように自分でトレイに載せるなんて、無理だよ。そもそも、そんな配置にはなってないし。

と思いつつも、まずは店内を細かく観察。

それほど広くないスペースにどんと置かれているのが冷蔵ショーケース。その中には、二晩悪い焦^こがれたケーキが銀色のトレイの上にはずりと並べられていた。ケース上部に取り付けられた照明に照らされた彼らは、まるで宝石のように輝いている。

「ううう、この間食べたケーキ以外にも種類がいくつもあるよ。あれとこれと……あとこっちのも絶対に食べてみなくちゃ！」

ここのケーキは、シンプルな外見からは想像もつかないほど奥深い味わいだから、侮^{あなど}れない。あまり期待せず口に入れると、心臓がひっくり返るほどの衝撃を受けることになるんだ。心して掛からないと。

正面の壁には賞状が何枚か飾られている。どうやら、国内の大会で優勝や入賞をしたときのものらしい。やっぱ、それなりの実力がある人なんだな。

右手奥にはクッキーやマドレーヌ、パウンドケーキなど焼き菓子を置いた棚もあった。そっちもすごく美味しそう。

「……だけどやっぱり、なんというか全体的に寂しい雰囲気なんだよな」

余計な装飾を省^{はぶ}いてすっきり仕上げていると言えば聞こえはいいけど、どちらかと言うと手抜きな感じの方が強い。これじゃあ、せつかくのケーキが可哀想だ。

——それに。

私は先ほどからずっと気になっていた「それら」を改めて確認していた。

「ええと、こっちがレアチーズケーキでこっちがベイクドチーズケーキかな。うん、そりゃ、現物を見ればだいたいわかるんだけど……」

ケーキのトレイや棚の焼き菓みに添えられている、プライスカード。商品説明を兼ねているそれらが、どうにも解読困難なのだ。

すごく癖^{くせ}のある手書きの文字は、右肩上がりで尖^{とが}ってて読みにくさまックス。これじゃ、商品名を読み上げながらケーキを注文するのも難しそう。ただでさえ、洋菓子って舌を噛みそうな名前が多いのに。

どうして今まで、このことを誰も指摘しなかったんだろう。それがすごい謎。私だって決して達筆^{たつひ}ってわけじゃないけど、これよりはいくらかマシなものが作れるよ？

うーん、なんかわからないけど、ものすごくムズムズする！

およそケーキショップとは思えない店構えや内装、そしてお客に優しくない商品説明。こんなに短時間で次々と問題点を見つけてしまった。もしかして、こんなに美味しいケーキの店なのに地元だけの人気止まりになっている理由って——

「いらつしゃいませ」

しばらくきよろきよろしていたら、奥から声が出た。そして姿を現したのは、白くて長い帽子に白い仕事着を身につけた男性。服装からすると、パティシエだろう。

「ご注文はお決まりでしょうか」

そう言いながら彼は、手にしていたトレイをショーケースの中に入れていく。ついでに、先ほどの非常に読みにくいプライスカードの向きを手早く直した。

——うわっ、いきなりすごい人が出てきたよ……！

もしかして、この人が噂の店長だろうか。うんうん、確かに真由ちゃんの話どおり、なかなかのイケメンだな。彫りの深い顔立ちで、西洋の王子様風。男性なのに肌は陶器のように透きとおっていて、すごく羨ましい。

だ、だけど……

「ご注文はお決まりでしょうか、お客様」

なんかおかしいよね、この接客の仕方。

とりあえず、この無愛想な声はどうにかならない？ その上、すごく不機嫌な顔なんだけど。なんで私、いきなりガンつけられてるの？

「そ、そそそ、そのつ、私——」

しかもこの人、かなり背が高い。さらに長い帽子を被っているから、とても高い場所から見下ろされているような威圧感がある。

だけど私、今日は仕事で来たんだもの。これくらいのことでは怖気づいていたら駄目だ。そう思って、慌てて名刺を取り出す。

「私、『如月企画』から参りました、田村と申します。このたび、当社で発行しております『ニコニコタウン☆霞が丘』で、貴店の特集記事を組ませていただきたいと思います——」

だけど、目の前のパティシエは私の名刺を一瞥すると、吐き捨てるように言った。

「その話なら、はっきり断ったはずだ」

「……は？」

「この店を宣伝する気などまったくない。帰ってくれ」

なっ、なに!? あまり気乗りしていないとは聞いていたけど、この対応は想像していた以上にひどい。

「で、でもですね——」

「こっちは忙しいんだ、これ以上話すことなどない」

仏頂面(ぶつどうめん)でぼつさり切り捨てられてしまつて、正直とても怖かった。

だってこの人、まるでデッサン用の石膏像(せっとうざう)みたいな顔をしているんだもの。パーツや配置が完璧で迫力がある。

「あ、あのっ——」

そんなことを言わずに話だけでも、と続けようとしたところで、背後の自動ドアが開いて店にお客さんが入ってくる。

「いらっしやいませ、ご注文がお決まりになりましたらどうぞ」

もちろん、パティシエは私のことなど完全無視で接客を始めた。

「ええと、今日はガトーショコラとモンブランと、それからレモンのタルトと……」

品の良さそうなおばさまは、能面のように無表情な男に怯む様子もなく、次々にケーキを選んでいく。あつという間に、その注文数は十個になった。ちなみにブライスカードに書かれた名前は全く無視で、お目当ての商品を指さしつつ適当に呼んでいる。

「それではお包みますので、しばらくお待ちくださいませ」

なんなんだろう、この人。もうちょっと愛想良くできないのかな？

そんなことを考えつつ突っ立っていたら、おばさまが私の上着をつんつんと引っ張つてから、小声で話しかけてきた。

「今日は店長がお店番でラッキーだったわ。彼、とてもクールなんだけど、そこがまた素敵なのよね〜！」

そうはしゃぐおばさまは、恋する少女の瞳になっている。頬もバラ色に染まっていた。「でもね、いくら店長が素敵だからって、いつまでも見惚(みと)れていては駄目よ。早くどのケーキにするか決めないと、すぐに売り切れてしまうわ。そうじゃなくてもこのお店、開店や閉店の時間も気まぐれに変わるから、うかうかしてられないのよ」

「は、はあ……」

なんですか、その王様みたいな商売の仕方は！ 駄目だよっ、常連さんが甘い顔をしているからアイツはつけあがるんだ。

「お待たせしました、四千と三百五十円になります」

「はあい、五千円と……細かいのはちょうどあるわ」

おばさまは息子くらいの歳のパティシエに、にこにこ微笑みかける。相手がどんなに無表情でもまったく気にする様子がなかった。

そのおばさまが出ていってしまつと、パティシエはまた私をじろつと睨み付けた。

「お前、まだいたのか。そんなところでいつまでも突っ立っていられたら商売の邪魔だ。とつとと去れ、さもないと営業妨害で訴えるぞ！」

正直、泣いちゃうくらい怖かった。だけど、簡単に引き下されるもんですか。

「あ、あああ、あのですねっ！」

「なんだ」

かなり台詞囁んじやったよ。案の定、彼は私をさらに睨み付けてくる。

「あなたの接客の仕方、絶対に間違ってます！ どうしてそんなつまらなそうに店番してるんですか、すっごいやる気がないように見えますよ？」

しまった、ここは「大変申し訳ございませんでした」と平謝りする場面ではなかったらうか。

でも一度開いた口はもう止めることができなかった。

「お客さんが甘やかしてくれるからって、いい気になるんじゃないですよ！ こんな高飛車なやり方してたら、今に誰も来なくなります。それじゃ、せつかくの美味しいケーキが可哀想です！」

一口食べれば、その素晴らしさがわかる究極のケーキ。

でも、まずは手に取ってもらわなくては始まらない。

そのためにも気持ちよく購入してもらえる環境を整えないと。

ショーケースの中に並べられたケーキは、それぞれが素敵なお宅に買われていくのを楽しみに待っている。なのに、なんなのよ、コイツ。そんな彼らの純粹な気持ちを踏みにじるなんて……！

「——どうして、俺がお前に意見されなきゃならない？ そんなこと、頼んだ覚えはない」

しかし、目の前の男は水のような表情を少しも崩さずに言った。

「いつもはここに、店番の人間がいる。今日はたまたま都合が悪くて来ていないだけだ。言いたいことはそれだけか？ 話が全部終わったなら、今度こそ出ていけ！」

「で、でで……でもっ……」

完全に怒らせてしまった。これじゃもう、なにを言っても無駄だろう。わかってるんだけど、まだ言い足りない。

「ごめん、社長。コイツの首を縦に振らせるなんて私には無理、石頭の石膏像と対等にディスカッションなんてできっこない。

完全に商談決裂。もう諦めて。

「だっ、だからっ、わ、私が言いたいのは——」

「うるさい！ とっとと去れと言っているだろう。自分で出ていけないなら、力ずくで追い出してやろうか!？」

すぐにでも私を外に放り出しそうな勢いの男に必死で食い下がっていたら、どこかで携帯が鳴り出した。どうもそれは彼のものだったらしく、ポケットに手をつ込んで電話を取った。

「はい、神崎です。……ああミズエさん、お疲れ様です。——え？」

そこで、一度彼の言葉が途切れる。電話の向こうからはなにやらまくし立てるような声が聞こえてくるけど、話の内容まではわからない。

「……はい、はい、ではお大事に」

なんだかトラブルっぽい？ 電話が切れたあとも、彼はしばらく暗くなった液晶画面を見つめたまま低く唸^{うな}ってる。

そして、また続く沈黙。

この場から逃げ出すことも、かといってこれ以上話を続けることもできないまま、私はその様子を見守っていた。

「——お前、これから暇か？」

どれくらいの時間が経つてからだろう。再び私の耳に届いた言葉は、先ほどの怒りの籠もったものとはほど遠いものだった。なにか答えれば良かったのかもしれないけど、驚きすぎて声にならない。

「売り場のパート女性が腰を痛めてしばらく来られなくなった。代わりに店番をやってみるか？ それだけ大口を叩くんだ、お前の言う正しい接客とやらを是非見せてもらおうじゃないか」

な、なに、それ。

「これから何を当たるのも面倒だしな。できるもんなら、やってみろ」

この人って、やっぱり変。これって、人にものを頼む態度じゃないよね？

とは思ったものの、そこではたと気づく。

そうそう、これって、またとないチャンスかもしれない！

「ちょっと待ってください！ 会社に連絡を取ってみます」

私は携帯を手に、一度店の外に出る。そして、大きく深呼吸してから通話ボタンを押した。

「もしもし、社長ですか。田村です」

『おおうーっ、田村ちゃん！ もしかして、早速取材のオッケー出ちゃった？ さっすがだねー、偉い偉い』

「い、いえっ、そうじゃないんですけど……」

いきなり早とちりされちゃった。だから困るんだ、社長のこの大雑把^{おおざっぱ}な性格は。

「実は……」

私はこれまでのいきさつをかなり端折^{はしよ}った感じで伝えた。もちろん、喧嘩^{けんか}をふっかつたなんてことは絶対に内緒。

社長は電話口でふむふむと頷^{うなづ}いている様子。

『へええ、パートさんが急に来られなくなったのか。それはとてもお困りだろうね。いいんじゃない？ 今日昼までそこで取材する予定になってたんだし、それを夕方まで

延ばしたって全然平気だよ。それに、店の売り場に出ていればお客様の生の声も拾えるからラッキーじゃない?」

「あ、でも、まだ取材の承諾はいただけけてないんですが」

「いいよ、いいよ。先方が困っているなら、なんでも協力して差し上げなさい。今回の依頼主は以前仕事でとてもお世話になった人でね。だからその恩返しも兼ねて、今回の特集記事を引き受けたんだ。田村ちゃんにも是非協力してほしい。今、田村ちゃんが担当しているホームページは何件分だっけ? その更新だけきちんとしてくれれば、他の仕事はみんなで肩代わりするから心配しなくていいよ」

「ええっ、そんなにいいんですか!」

「もっちゃんさ、俺に任せなさいって!」

なんなの、このアバウトさは。まあ、もともとは社長の趣味の延長で始めたっていう会社だしね、なんでもアリなところが多いんだけど。

『田村ちゃんの頑張りが店の売り上げアップに結びつけば、こんなに嬉しいことはない。ま、先方の機嫌を損ねないように頑張ってくれよ!』

「は、はあ……わかりました」

実は、すでに一度やり合っちゃってるんだけど。

『じゃあね、田村ちゃん。いい報告を待ってるよ!』

なんか、簡単にいろいろ話が動いたような。ちょっと拍子抜けしちゃうなあ。

電話を終えて店に戻ると、パティシエが腕組みをして待っていた。私の顔を見ると、よろしゅ容赦なくじろりと睨み付ける。

「話をついたのか」

「は、はあ……」

「じゃあ、こっちに来い」

それだけ言うと、彼はショーケースの裏から店の奥へと入っていく。私も慌ててあとに続いた。

3

突き当たりに裏口と思われるドア。左奥の壁一面に並んでいるシルバーの扉は冷蔵庫やオーブンなのだろう。その前は作業台と水回り。広すぎず狭すぎず、機能的に設計されていると思う。

こういうところについてい目がいっちゃうのは、美大の授業で「空間デザイン」をやったからなんだよね。建物の設計図とかも一通り書いたことがある。まあ、専門外の講義

だったし、その内容はごく初歩的なものだったとは思うけど。

売り場スペースとの仕切りはガラス張りだから、もしもここでひとり作業をしてもお客様が入ってくればすぐにわかるってことか。

「ほら、これを着ろ」

男は作業台下の扉を開けて、シュークリーム型の白い帽子とフリルのたつぷり付いたエプロンを取り出した。

うわ、ちょっと少女趣味すぎる気もするな。着るのになんか勇気がある。

もしかしてコレ、この男の趣味？　なんか意外。

「――聞こえてるのか？」

うっわー、怖っ！　なんでここまで威圧的な話し方をするんだろうか。やつぱ、さっき文句言ったこと、まだ怒ってるんだな。

「はい、わかりました」

とりあえずこれ以上ご機嫌を損ねないためにも、ここは素直に言うことを聞いておこう。私は髪をひとつにまとめてから、手を洗う。食品を扱う仕事だしね、このへんはしっかりしとかないと。

……おおっ、なかなか様さまになってるじゃん、自分。

鏡に映った自分のエプロン姿を確認してから、表の売り場スペースを覗のぞく。すると、

ショーケースの中をチェックしていた男が、こちらの視線に気づいたらしく振り向いた。「レジの使い方はわかるか？」

必要最低限のことしか話さないこの男。私が頷くと、そのままキッチンへと姿を消した。

「……あのー？」

え、それだけ？　他に注意事項とか全然なくて……!?

慌てる私を気に掛ける様子もなく、ガラスの向こうで彼はさっさと作業を再開していた。なんなのーっ、あとは勝手にしろってこと？　そんなっ、無責任な――

「ごめんくださいーい」

放置されてしまったことに戸惑う暇もなく、店の中に数人のお客が入って来た。

……っっていうか、いつのまにか外に行列ができてませんか？　嘘おっ、さっきまでこんな

なになかったのに。

「い、いらっしやいませー！」

いきなり本番ですか？　これはかなりきついなあ……

「ええと、注文してもいいかしら？」

「はいっ、お伺いいたしますー！」

「じゃあ、イチゴのショートとチョコレートケーキを三つずつ……」

こっちがあたふたと対応している間に、店の前の行列がまた延びている。待ったなし

の状況ってわけね。こりゃ、なかなか大変そう。

幸いなことに学生時代にケーキ屋でバイトをしたことがあった。だから、接客の流れはなんとなくわかる。

シルバーのトレイとトングを手に、注文どおりの品をケースから取りだしていく。すべて揃ったらお客と一緒にケーキの数を確認してから、後ろのカウンターで箱詰め。慣れないもんだから、レジ打ちは先になったりあとになったり、その場にに応じて動くしかなかった。

代金を受け取ってケーキの箱を渡すと、すぐに次のお客が注文を入れてくる。息つく暇もないとはまさにこのこと。さらに、絶えず鼻先をくすぐり、私を誘惑する甘い香りが漂っている。

もしかして、この仕事は拷問だったかも。目の前に絶品ケーキがあるのに食べられないなんてっ……。そう思っても、後の祭り。

ううう、いつまで続くのかな、この労働。おなかすいたっつ。

二時間ほどが経過する頃には、いつの間にか、ショーケースの中がかなり寂しくなっていた。こころってかなり人気のシヨップだよ。

こんなに地味な店で、しかもパティシエの接客は最悪なのに、なんかすごい意外。確

かにケーキはどれも外れがない絶品の味だとは思うけど……

「どうだ、様子は」

そんな風に感心していたら、タイミンク良く顔を出す超不機嫌パティシエ。彼はお客様の列がちやうど途切れたのを確認してから、ドアの前に「準備中」の札を出した。

「ほら、今のうちに飯にしろ」

キッチンに入ると、補助テーブルの上にサンドイッチと紅茶の入ったマグカップが置かれていた。

「本来ならば、俺が店番を交代するところだが、今日は商品の追加補充が先だ」

この人は作業の合間に食べるつもりなのか。こっちに合わせて仕事を中断する気配はない。

こうやって眺めている間にも、綺麗にカットされたケーキに次々とデコレーションを施していく。

前に他のケーキ屋でバイトしたことがあると言ったけど、そこは全国展開しているチェーン店だ。

そこではほとんどのケーキが工場で製造されていて、毎朝大型のトラックが納品に来ていた。お店ではそれを大型の冷蔵庫に保存して、随時店頭に並べればオッケー。パイトの私だって、すぐに覚えられる簡単な作業だった。

だから、ケーキ製作の全工程をじっくり眺めるのはこれが初めてだったりする。

……へええ、個人の店でも一度にこんなにいっぱい作るんだな。それなのに、途中で品切れ状態になるなんてすごい。そういえば、今日も平日だっていうのに結構な客足だもんね。

「なんだ、そんなに珍しいか」

じーっと手元を見つめていたのがばれたのだろうか、彼はすぐく面倒くさそうに口を開く。

「お前が客をさばくのがあまりにも速いから、こっちは急せかされる羽目はめになったんだぞ」絞り出したクリームの上にはばらばらと散らされるピスタチオ。小さくカットしたレモンを飾って、レアチーズケーキの完成だ。ホント、美味しそうで、見ていてうっとりとしてしまう。

そして実際、夢のような味わいなんだよな。底に敷かれた薄いスポンジと濃厚かつソフトなクリームチーズ生地が絶妙にマッチングしている。それらが渾然こんぜん一体いつたとなって舌の上でとろけていく様子といたら……ああ、思い出ただけでよだれが出てしまっそう。

コイツって性格は最悪だけど、ケーキ職人としての腕は一級品なんだろうな。

……とかなんとか、考えているうちに。

ひとり分の食事なんてあつという間に食べ終えちゃって、マグカップを片手に持った私の視線は次々と仕上がっていくケーキにますます釘付けになっていた。

「……あ、あのー……」

むやみに声を掛けるのはまずいかなとは思ったんだよ、かなり集中して作業しているんだろうしさ。でも、そろそろ限界だった。極上の匂いを嗅ぎ続けて、今や私は大変危険な飢餓状態あちいに陥りつつある。

「うるさい、黙ってる」

そう言われると思っていた。でも駄目、これ以上はどうやっても我慢できない。

たぶんこの人には余計な前置きとか必要ないんだな。なんとなくそんな気がする。言いたいことがあったら、単刀直入に切り出すほうが得策のようだ。

「その切り落とし部分、私が味見しちゃ駄目ですか？」

そう言いつつ、作業台の隅に置かれた皿を指さした。

でも、小さいタルトの中にカスタードクリームを絞り出していく彼の手は止まらない。

「え、ええと……」

もしかして聞こえてないのかな？ そう思ってもう一度口を開きかけたところで、目の前にどんと皿が突き出された。

「どうせ捨てる部分だ。ゴミが減るからちよっどいい」

すごいっ、嫌みなくらいたっぷりと盛られたケーキの切れ端。おおーっ、どんなに嫌みを言われたって許しちゃうっ！

だって、さっきからずっと気になっていたんだもん。大きなサイズのスポンジを重ねたケーキを切り分けるときに、薄くそぎ取られた一番端の部分。中に挟んだクリームやフルーツが少し飛び出していたりしてポリウムもあり、かなり美味しそう。

「あっ、ありがとうございます！」

ああっ、嬉しい！ これでどうとう、究極のケーキと再会できる。

いきなり腰を痛めてしまったパートの女性には申し訳ないけど、私のおなかにはとてもありがたい。

店の取材に来たはずが、いきなり売り場の手伝いをさせられたけど、それも許せちゃう。いいんだ、このケーキを口にできるのなら。

もちろん、お持ち帰り用にお買おうとも思ってるけど、ここのケーキって単価がかなり高いんだよね。私の寂しいポケットマネーでは、そんなにたくさんさんの種類は買えないし。もちろんおなか満足するまで買いたいんだけど、絶対に無理。

勝手に紅茶のお代わりだっていただいちゃうよ、いいよね？

……それにしてはすべてが美味しいっ……！ あまりに嬉しすぎて、顔がにやけたまま元に戻らなくなっちゃいそう。

こっちはレモンケーキの切れ端、そして崩れてはいるものの味はまったく損なわれていないタルト生地。どれも言葉では言い表せないほどの美味しさだ。あああ、フォークを動かす手が全然止まらない……っ！ もっと味わってゆっくり食べなくちゃと思って、身体が言うことを聞かないよ！

「……あの……」

そして、数分後。

早くも綺麗さっぱり空っぽになった皿を手に、私は再び彼に声を掛けていた。

「よかつたら、そっち側の切れ端もいただけますか？」

「……まだ食うのか」

心底呆れているパティシエの視線も全然気にならない。どうせ捨てる場所なんですよ？ だつたら、私のおなかの中に入れてよ。

エネルギー満タンになった午後の店番は、すこぶる快調だった。

「いらっしやいますーっ！」

お客様に掛ける声も、無意識のうちに体育会系の威勢の良さになってしまつて大変。店内に響き渡る自分の声にハッと我に返り、反省するのまたたびだった。

「あああ、どうしたの。今度はずいぶん元氣な子が入ったじゃない」

接客を続けていてわかったんだけど、この店は毎日のように訪れてくれる常連さんがすごく多いみたい。

なんだか嬉しいな、自分と同じようにケーキが大好きで通い詰めちゃうお客がこんなにたくさんいて。そう思うだけで、次々に訪れる人すべてが「昔からの大親友」のような気がしてくるから不思議。自然に顔がほころんできちゃう。

「はいっ、新入りです！ 不慣れですが、よろしくお願いします！」

中学高校時代は軟式テニスをやっていたので、元気に挨拶するのは得意だ。ずっと外で運動をしていたせいかな、今でも一年を通してこんがり小麦色状態。正直なところ、フリルのたくさん付いたこのエプロンはあまり似合っていないと思うけどね。

「ほほほ、わざわざ自己紹介をありがとう。——そうね、追加でそちらのガトーショコラもひとついただこうかしら？ 元気なあなたを見ていたら、なんだか食べたくなっちゃったわ」

なんかよくわからないけど、ひとつ余計に売れたんだからいいかな？ 次から次へと気持ちいいくらいに買ってもらえて、忙しいけどとても楽しい。

「ええ、間に挟まれたガナッシュクリームも意外な組み合わせでいいです」

美味いケーキの話だったら、いくらだって盛り上げられるよ。なんたって、情熱が違

うもの。今まで有名無名どんなショップでも目につくところはすべて一通り味見をしてきたし、なにより私の舌は「本物」を見極めることができるんだから。

「まあ、よくご存じなのね。じゃあ明日もあなたのおすすめを買いに来るわ。待っていてね、新入りさん」

初対面の相手でも、短時間ですっかりうち解けてしまった。これぞ、ケーキの取り持つ縁をやつたね。

「はいっ、是非お待ちしています。ありがとうございました！」

お品物とおつりを渡したところで、背後のドアが開く。キッチンと売り場はガラス張りの壁で仕切られていることは前に説明したとおりで、ガラスを埋め込んだ白木のドアで出入りできる。そこから、パティシエがシルバーのトレイを持って顔を出した。

「追加、仕上がったぞ。運ぶのを手伝え」

相変わらず威圧的な口調。本人は認めてないけど、とりあえず取材相手ってことになるんだし、多少のことは大目に見なくちゃと思うけど……本当、偉そうな男だ。

「あつらつ、神崎さん！ 相変わらず素敵ね！」

——と。

私たちの会話に割って入ってきた大声は、次に順番待ちをしていたお客様のもの。振り向いてその顔を見れば、予想どおり瞳がハートマークになつてる。

「いつもありがとうございます。どちらをお取りしましょうか？」

当然のことながら、彼は慣れた手付きで接客を始める。

うーん、でもやっぱり、表情が硬いよなあ。もうちょっと、なんというか……柔らかな雰囲気を出せないのだからか。

それでもまあ、物言わぬ横顔は照れてるように見えなくてもいいから、やっぱ綺麗な顔をしていると得だよな。

そんな風に考えながらしばらく接客を観察していると、おもむろに振り向いた奴に睨み付けられた。

『おい、ぼさっと突っ立ってないで仕事しろ』

そう言っているような目で見られた。そうか、裏からケーキを運ぶんだっけ。すつかり忘れてた。

「——おや？」

シルバートのトレイに載ったできてスイーツを運んできた私の隣で、パティシエがふと声を上げる。

「なんだ、これは」

あ、やばい、レジの横に置いたままだった。彼が手にしていたのは、私が書いていたプライスカード。ちょっと手が空いたときに、少しずつ作業していたんだ。

「あ……ええと、うっかりクリームで汚してしまったものがあつたので、それだけでも作り替えてみようかなと思って……」

適当にでつち上げた言い訳を口にした。

本当のことなんて言えないじゃない、今のカードじゃ文字が汚すぎて読みにくいんです、だから書き直してみました、なんて。

実際、数時間様子を見ていても、ほとんどのお客がきちんと読めていなかったし。中には頑張つて解読しようとしている人もいて、可哀想になつちやつた。

「結構、上手いじゃないか」

「え？」

続けて聞こえてきたのは思つてもいなかった言葉で、ちょっとびつくり。

「この調子で頼むぞ。好きにやってくれ」

そう言つて、思わず固まってしまった私の脇を通り抜けていく仕頂面パティシエ。ちゃんと褒めてくれるんだ。

もしかして、……それほど悪い人じゃないのかも。

そして、夕方になり、ケーキも完売して店じまい。

いつの間にかすっきりと片付いたキッチンで、パティシエは早くも明日の仕込みを始めている。そうか、今日は何時で上がりとか明確な区切りがない仕事なんだな。

三層に分かれたムースは一段ずつ流し込んで固めなくちゃならないし、それだけでもすごく手間と時間が掛かりそう。

「こっちはまだしばらく手が離せないから、飲み物が欲しければ自分で勝手に淹れろ」
 そう言われたので、湯気の立ったやかんを持ち上げてティーポットにお湯を注ぐ。うん、このリーフも良い香り。製菓材料としても使っているんだろう、様々な銘柄の紅茶がガラス製の密封容器に入っている。それが全部飲み放題って、贅沢な環境だよな。
 三分蒸らしてふたつのカップに注ぎ、それを両手に持って補助テーブルの前に戻る。いつの間にかここが私の指定席。ずるずると丸椅子を引きずってきて座った。

「ほら」

ホッと一息ついたときにタイミンク良く差し出されたのは、午後の作業で新たに出土とおぼしき「切れ端ケーキ」の山。

「まだ食えるか？ 欲しけりゃ、好きだけやるぞ」

「ええ〜っ!? い、いいんですかっ……!」

とか言いつつも、すでにフォークを手にしてスタンバっていますけど。

「どうせ、捨てるモノだと言っただろう。ゴミを廃棄するにも金が掛かるんだ。お前が

胃袋に入れて持ち帰ってくれるならちようどいい」

……なんか小憎らしいこと言ってるけど、気にしない、気にしないって。

「いただきます!」

きやあああっ、さすがにこれだけあれば数時間はおなかいっぱいでいられるはず!

今日は一日、立ちっぱなしで働いていたしね、消費したエネルギーは相当な量だったと思う。こうなるといつもの食事ではフォローできないのが私の体質。夕食に炊くご飯の量を五割増しにして欲しいと、家にメールをしようか考えていたところだった。

でも、これだけ食べれば、いつもの量でもどうにか足りるだろう。

「これはイチゴショートのスポンジですね。そしてこちらがクリームロール。それに、チーズバーの切れ端もこんなにたくさん……!」

無造作に積まれた切れ端も、私にとって宝の山。これだけの量を定価で購入したら、あつという間に万札が飛んでいくわ。

ああつ、どれもこれもなんて美味しいの。食べても食べても全然飽きないってすごいよ! 感激のあまり、涙と鼻水が一緒に出てきそうになってしまった。

「本当に良く食うな。そんなに美味いか」

呆れ果てた声が遠くから聞こえてきて、ハッと我に返る。

「ええ、もちろん! 最高に美味しいです」

私が元氣よく答えると、彼は不思議そうな顔になった。「慌てて詰め込みすぎて、腹でも壊したら大変だぞ。こっちは責任取らないから。限界が来る前に自己判断でストップしろ」

ええと……これって、一応は心配してくれてるのかな？

「あつ、ありがとうございます！でもご心配なく。このお店のケーキだったら、私はいくら食べても大丈夫ですから……！」

そう胸を張って答えた。

ちっちゃい頃から「まるでケーキが主食みたい」と周囲に呆れられていた。

普通に一人前のご飯を食べたあとでも、ケーキの二、三個は菜に入る。「甘いものは別腹」って言葉があるけど、私はそれをケーキ、しかも一級品で超ベリーグッドに美味しいものに限定したい。

有名ブランドや超人気店だからといって、必ずしも私の舌を満足させてくれるとは限らない。だから「究極のケーキ」を求めて、今までずっとたくさんのお店を彷徨い続けていたんだ。

「あ、これって、褒め言葉ですからね！」

言葉足らずになってしまったかなと不安になって、ひと言つけ足す。するとパティシエはまた不思議そうに顔を上げた。

「——お前、変わってるな」

その言葉のあと、彼はまた視線を自分の手元に戻して作業を続けた。

一個ずつ型に流したムースをずらりと並べたバット。それを大型の冷蔵庫の中で休ませる。そこで一応の作業が終了したみたい。彼は補助テーブルに向かい合う形で座って、怪訝そうに私を見つめてた。

「若い女が言うことはみんな同じだ。カロリーが高い、太ると困るからとか言ってる。キを一方的に悪者扱いする。そのくせ、残らずしつかり胃に収めて後悔しているんだから始末に負えない。ああいう奴らを見ていると、虫酸が走る」

それから、彼はカップを手にとると、一気に半分くらい流し込んだ。

あれ、これってちょっと意外な発言。人には厳しいけど、ケーキに対する愛情は本物なんだな。

「お前みたいな人間は初めて見たぞ」

そう言いつつ、彼はまた紅茶を一口すすった。こうしていると、長い手足がとても邪魔そうに見える。

「お茶だけでいいんですか？美味しいケーキがこんななにいっぱいあるんだから、ご自分もいただけばいいのに。ほら、よかったら、ご一緒にどうぞ」

遠慮しているのかなと思って気を利かせてみたけど、とたんに思い切り嫌そうな顔を

されてしまう。

「悪いが、俺は甘いものは苦手だ。本来なら味見だつてしたくない」

「ええっ!?」

この台詞には、天と地がひっくり返るくらい驚いた。

「そんなのおかしいです！ だったらなんでこの仕事に就いたんですか……!」

誰だつて当然そう思うよね。だから、いつもしかめっ面して作業しているの？

「もしかして、……思い切りマゾな方なんですか？」

ほらほら、またとんでもない失言を。もちろん、思い切り睨まれちゃった。

「仕事を選んだ理由など、お前に話す必要はない」

奴はそう言うとそのままくりりと背中を向けて、自分の世界に入ってしまった。レシ

ピのノートなのかな？ 分厚いファイルを広げて、ひとりでおつぶつぶ言ってる。

「あ、いいです。私も別に知りたいとは思わないですし」

これからしばらく、ここで美味しいケーキが食べられれば、それだけで幸せ。天才パ

ティシエの秘密になんて、全然興味ないから。

……あ、違うか。本来の目的は「取材」なんだから、こんな心構えじゃ駄目だな。

もうちょっと踏み込むべきだろうか、でもあまり性急に話を進めるとまたヘソを曲げ

てしまいそうな気もする。職人氣質の人って、みなさんもれなく「取扱注意」だもんね。

立ち読みサンプルはここまで

これについては、美大時代にだいぶ学んだわ。

しばらくして、彼はカップを補助テーブルに置くと、さっと立ち上がった。休憩時間

は終了、次の作業に入るらしい。

「明日も来られるのか？」

空っぽになつてしまつたお皿を未練がましく見つめていた私は、その声にハッと我に

返つた。

「は、はいっ！ 土曜日なので、大丈夫です。今週は急ぎの仕事ありませんし」

締め切り直前とか、急な作業が入ると土曜日出勤になつたりする。でも現時点でなに

も連絡がないなら平気なはず。もちろん、一度会社に電話を入れて確かめる必要は

あるけどね。

「そうか、じゃあ八時半頃に来てもらおうか。土日は忙しいからな」

「わ、わかりました!」

もしかして、私もちょつとは役に立ててるのかな。そう思つたら、少しだけ嬉しく

なつた。